

## 日本文学(近代)研究'05

鈴木 貞美

概観 文 学 日本「近代文学」研究にとって、二〇〇五年は長くつづいた混乱がひとつの終わりを告げ、新たな探究の開始を上げる年になったと、十年後に言えるようになることを願ってこの筆をとる。まず、この十数年つづいてきた「近代文学」研究をめぐる環境の変化について概括しておく。国際化、学際化、情報化、大衆文化の多様化、少子化などに対応した大学の学部学科の再編、とりわけ国立大学の法人化など高等教育制度の変更が相つぎ、さらに二〇〇五年に公表された中教審答申も、新たな対応を研究者に迫っている。仕事盛りにさしかかった世代の研究者に押し寄せる事務仕事の増加は、明らかに過労死や過労からの病を招くほど過酷なものになっている。これによって、日本の人文社会科学全般に研

究の停滞が生じていることは否めない。加えて人文系諸科学には文化全体における相対的な地位の低下が有形無形の圧力となつてのしかかっている。だが、そのなかで、日本近現代文学研究ほど沈滞と混乱が続いている分野は珍しい。

その根本的な理由は今日の学芸全般の国際化、学際化、情報化、幼稚化の波に対処する有効な方法を開発しようと思わず、それらの波間で翻弄されてきたことにつきるが、そもそも研究基盤の脆弱さが露呈したものといわざるをえない。特定の作家の愛好者の集りが「学会」や「研究会」を名のったり、調査即研究と思ひ違えたり、方法論をめぐる論議を回避するなどの事態が研究者マーケットの巨大さに甘えて長く放置されてきた。論文の形式も審査基準の明確化もなされず、レフェリー制度をとうとうとしない学会誌に対して疑問の声も大きくならない。戦後イデオロギーから抜け出せず、近現代の文芸・文化史のパースペクティブを見誤ったままであることも大きな弊害である。

制度面の改革については、昨年の本欄で紅野謙介氏が課程博士号取得について、研究方法の問題とからめてふれているが、国際社会では博士号がいわば研究者の運転免許証(ただし、免停処分のない)の役割をもつのは人文

系も同じ、資格をもたないとプロジェクトの成員と認められないことも多い。二〇〇五年の中教審答申は近い将来における論文博士の打ち切りを示唆しており、今後、三十代、四十代の専任教員の申請増加が予想される。課程博士とともに外部審査員の必要数など制度と審査基準の国際・国内標準づくりを急がないと混乱は拡大するばかりだろう。

次に研究内容における、この十数年の著しい変化について、大まかに三点に総括しておきたい。第一に女性の書き手による文芸をめぐる研究が盛んになったこと。一般社会で女性性が抑圧されてきたことに対するフェミニズム運動からはじまった「女性文学」再評価の動きはヘテロ・セクシュアリスト・イデオロギー(異性愛主義、批判など)により、また小説中心主義から脱して、ようやくバランスのとれた見渡しがつきつつある。早くからジェンダーの問題と取り組んできた中山和子さんの論文集が『中山和子コレクション』全三巻(翰林書房、五月完結)にまとめられるかたわら、入れ替わるように岩淵宏子・北田幸恵編『はじめて学ぶ日本女性文学史・近現代編』(ミネルヴァ書房、二月)、岩淵宏子、北田幸恵、長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』(至文堂、二月)など便利なツールもまとめられた。だが、ジェンダー・バイアスは文

芸の世界においても一般社会と同様なものだったのか、明治期から作者、読者ともに女性の数が圧倒的に多い短歌というジャンルについて、「旧派」の動向もふくめて、その特殊性が解明されてきたかなど、基本的な問題が依然として未解決のまま残されている。

概観 文 学 女性史の視角もそのひとつなのだが、第二にあげるべき変化は、文化全般と関連させる研究が盛んになっていること。文芸も文化の特殊な一領域である以上、その性格をよくふまえてなされるなら、本来、歓迎すべきことなのだが、これも欧米の歴史研究が生活文化史の領域を開拓してきたことやメディア・スタディズなどの動きに刺戟を受けてのこと、それらの戦略的立場も方法もわきまえずに便乗するので、迷走している。欧米の知的、文化的コンテクストを無視して、一知半解のまま新理論を日本近現代にアテハメる傾向が長くつづいてきたが、それがまったく払拭されていない。とくに国民国家の形成や帝国主義的膨張という結論の用意された表象を文芸の領域でなぞるにすぎない傾向が一時期横行した。たとえばヨーロッパ近代の出版と国民文化形成をモデル化したベネディクト・アンダーソンの「幻想の共同体」論を明治期にアテ

67 衆文化がヨーロッパよりも豊かに開花し、そ

の研究は近年、かなりの進展を見せている。

では、それが明治期の国民文化の形成期にどのように組みかえられたのか、という問題視角は一部の研究者しかもっていない。新理論を日本の文芸・文化に適用するには、ほとんどの場合、その方法自体を練り直すことが不可欠となる。まず文芸(史)と精神文化(史)全般、メディア(史)、生活文化(史)、その相互関連を問うことからはじめるべきだ。そんな専門学会の動きをよそに、社会思想史の研究者によって、一人の詩人の評伝がまとめられた。筒井清忠『西條八十』(中公叢書三月)がそれ。都市大衆文化における文芸の意味を浮かびあげる。このような仕事がどんどん出てくるだろう。

第二の変化は「外地」で展開した文芸・文化の研究が日本在住の中国人やコリアンをふくめて盛んになっていること。ここでは南富嶺「文学の植民地主義―近代朝鮮の風景と記憶」(世界思想社、二〇〇六年一月)をあげるに留める。というのも、日本帝国主義の「外地」での文化政策や文化事業の実態の解明が地道に進んでいることに無頓着な「文学研究」が多すぎるからだ。今後、二〇世紀アジア史の視点が重みをましてゆくだろう。

そのほか、地域密着型の研究も進み、たとえば日本近代文学会関西支部の編で、大阪近

代文学事典(和泉書院、五月)が刊行を見た。次に課程博士論文を編集しなおした二冊の書物に注目してみたい。山口俊雄「石川淳作品研究―「佳人」から「焼跡のイエス」まで」(双文社、七月)は、文壇や文芸ジャーナリズムの動きに接続しつつ、石川淳が新たな方法的開拓を行っていたことを作品に即して明らかにしようとする姿勢を賞き、はじめに結論ありきの「文化研究」とは逆に、作品の文化史上の意味の解明のために一九三〇年代の宗教思想や「中世的なるもの」への関心の渦などを浮かびあがらせる。惜しむらくは戦後批評が築いた自然主義―私小説系中心史観に対して、石川淳の仕事の意味を対置する構図になってしまっている。作家の作品史、文学史、文化史の再編は三者が互いに支えあう関係で考えてほしい。

もうひとつ笹沼俊暁『国文学』の思想―その繁栄と終焉(学術出版会、二〇〇六年二月)は、土居光知、岡崎義恵、池田亀鑑、久松潜一、風景景次郎らの「国文学」イデオロギー論に挑んでいる。このような課題に院生のときから取り組みを見せる人が登場してきたこと自体、明治を起点とする「国文学研究」の総体に対して反省のまなびを向けようとする問題意識がひろがり、近現代文学研究が新たな局面に差しかかっていることを示

すものだ。だが、残念なことに、日本においては学術研究史の蓄積があまりに薄い。目的を明確にし、概念編成の組み換えと価値観の転換、思想史との関連など方法を鍛え、内容を豊富化してゆく知の共同作業が必要だ。

なお両書とも学術論文に引用典拠の頁ノンブルをつける慣行を守っているが、学術書には注記部分を含めた索引、引用典拠、参考文献欄をそろえたい。自戒をこめて記しておく。文学史の書き換えに資する仕事としては、二〇〇四年刊行のハンドブックに類するものだが、木股知史編『近代日本の象徴主義』（おうふう）は、軽視されてきた領域に光をあてるにとどまらない意味をもっていた。象徴主義文学の研究は、古典評価の変遷や美術史、芸術論と学際的に展開するなら、小説中心、それも「自然主義」を指標とする文学史観を根本からくつがえす可能性を秘めている。さらにアーリー・モダニズムの受容とあわせて、モダニズム芸術論全般に再考をうながす仕事へと進むだろう。

他に二〇〇五年には『日本文学史—表現の流れ』（河出書房新社）が編集開始以来、二十年余かかって、当初の計画より一巻を増した全八巻で完結した（一月）。このシリーズは私自身が全面的にかかわったものなので気が引けるが、諸外国の大学院生にも新たな示

唆に満ちた便利な教科書として定評を得、これで勉強した人びとがすでに教授資格試験を受けるまでになっている。ただし、第五巻刊行後の長い休止期間中に、日本近現代思想・文化史研究は明治期天皇制と国家神道、国民国家及び国民文化の形成過程、大正生命主義の台頭など日露戦争後の文化変容、一九二〇年代の都市大衆文化、旧「外地」で展開した文芸・文化、戦時期の思想・文化、戦後イデオロギーなどの解明に大きな進展を見せた。

新編の部分に、それらの成果を取り込む工夫を行ったものの、編集の都合で、なほえない記述も多く残すことになった。また、たとえば拙稿「言文一致と写生」再論―「た」の性格」（国語と国文学 七月号）は、明治期の「言文一致」神話を解体再編し、独歩や蘆花の「写生」の意味も転換した。日本近現代文学研究は古い常識をくつがえし、新しいスタンダードに向けて着実に歩みつつある。危機のさなかにこそ、新たな強い芽は育つものかもしれない。

## 文芸評論'05

富岡幸一郎

二〇〇五年末に発覚した耐震強度偽装問題、本年はじめのホリエモン・ライブドア事件など、日本社会はフェイク（偽造）による騒動に終始しているが、経済・政治・社会の現実がきららかにしているのは、これまでそこに実体なり実業を見ていたことが完全に逆転してしまったことだ。

島田雅彦は「文芸時評」（朝日新聞 〇六年二月二十七日夕刊）で、「政権の支持率も企業の株価もイメージだけで上がった下がったりするのを見ると、文学よりも政治経済の方こそ虚業である」と指摘していたが、このような現実の「虚」にたいして、文学という虚構はどんな力と役割を持っているのか。こう問えば、昔ながらの「虚構」と「現実」という二分法のなかに入り込むことになりそうだ

が、松本徹は三島由紀夫を通して改めて文学をただ「私」の表現、個人の思想感情の表現としてではなく、「公」に深く関わるものとして捉え直す。三島こそ近代的な文学理念が排除した「古今集」の文学観を生きようとしたのだという。すなわち「力をも入れずして、あめつちを動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、たけきもののみ心をもなくさむるは歌なり」という、「天地」を動かす「文学」の価値である。（「あめつちを動かす 三島由紀夫論集」試論社、三島由紀夫 エロスの劇 作品集）

現在の地中で興味深いのは、虚構が現実かという二分法よりも、この「私」と「公」の区分であろう。インターネット上に氾濫するのはほとんど「私」語の世界であり、文学もこの肥大化する「私」の産物となりつつある。文芸批評はその本質において「無私精神」（小林秀雄）をふくむとすれば、それはその文体（スタイル）自体において当然現在にたいしてクリティカルなものにならう。高橋英夫の『時空蒼茫』（講談社）は、「私」の記憶と忘却のなかに、時代を越えた文学的想像力が見事に起動して、近代日本の詩人や作家たちの作品のみならず、浮世絵や歌舞伎、美術や音楽などに自在に連想の糸が織られていく。詩作品が批評文のなかに溶け込み、ポエジー

としての批評ともいうべき味わいが深い。多様な近代の詩の型をひとりの大詩人のうちに見ることは、三木卓の評伝「北原白秋」（筑摩書房）が実現している。「白秋の魔法が輝かせた日本語の魅力に酔って育った」という著者は、この詩人の生涯のなかに「大表現者」の姿を（その矛盾もふくめて）認めている。それはもちろん個人の表現といったものを越えた詩的言語の可能性の探究でもある。

〇五年の文芸評論のなかで、川西政明「武田泰淳伝」（講談社）は特筆されるべきものであろう。武田泰淳は川西氏にとって一貫したテーマであるが、この評伝はその主要作品を徹底的に検証しつつ、作家の実体験の持つ意味を時代のなかに深く刻んでいる。日本軍と中国軍が戦った戦場跡を千八百キロに及ぶ取材をし、「中国の戦場のなかに武田泰淳を置いて考える」ことがなされている。それはひとり泰淳という「怪物的偉大さ」をひめた作家だけでなく、戦後文学と呼ばれた文士たちの存在の「大きさ」を改めて感じさせる。

「戦後派は大きな観念を骨格にもつ。（中略）その観念を動かす根源的な場所や思考はどのようにして一人の文士のなかに発生したのか。そして根源的な観念は小説を書くときの細部とどのように連動していったのか。それを問う性質」とは、戦後派とはどういう存在であ

つたかを明らかにすることにならう」

武田泰淳「富士」、野間宏「青年の環」、福永武彦「死の島」、三島由紀夫「豊饒の海」、堀田善衛「橋上幻像」、椎名麟三「懲役人の告発」など、戦後文学の作家たちの代表作は一九七〇年代前半にはぼ出揃っている。いうまでもなく戦後派の文学の観念性は、その後、後にきわめて生々しい現実の風景があった。経済の高度成長がもたらした物質的充足と情報化社会の飛躍的展開は、しかし現実をバーチャルなものへと変貌させ、八〇年代からのポストモダニズムの時代のなかで、文学の観念を生み出す「根源的な場所や思考」がうしなわれていった。

坪内祐三の「別れる理由」が気になって（講談社）は、小島信夫が一九六八年から一年まで延々と雑誌に連載した超大作「別れる理由」を解説することで、時代の転換期を今日との連続と切断のなかであきらかにしようとした評論である。江藤淳の「別れる理由」批判に坪内は反論を加えているが、フォニーという江藤の批判は、実業こそが虚業となり、時代の下部構造そのものがにせ物としての「虚」を露呈している今日、もはや成立しないというのである。ホリエモンよりも、三島由紀夫が光クラブ事件をモデルにして描いた「青の時代」の主人公のほうが人間とし